



㊦ ボーリング調査を強行しようとする防衛施設局側の船（奥）に対して、必死の説得・阻止行動を繰り返す抗議船（手前）

㊧ 防衛施設局が設置したポイントブイの周りに待機し、潜水調査を阻止するカヌー隊



辺野古の基地建設は、1996年のSACO（沖縄に関する特別行動委員会）最終報告の中で、沖縄県宜野湾市にある普天間基地を返還する代わりに代替基地として建設計画が持ち上がりました。現在は、事実上の基地建設着工であるボーリング調査が進められようとしており、座り込みの闘いにより阻止し続けています。

辺野古ボーリング調査着手 怒りの「絶対阻止」抗議行動

那覇防衛施設局は、9日午後、普天間飛行場代替施設建設に向けた名護市辺野古沖でのボーリング地質調査に着手し、ボーリング作業をする5地点の海域で浮標設置などを行いました。

施設局は当初、作業船の出港場所を辺野古漁港と米軍基地「キャンプ・シュワブ」のいずれかで検討していると発表しました。それを受け、沖縄中、日本中から500名もの人々が集い、ボーリング調査強行を阻止するため、緊張の中、その瞬間を待ち受けていました。しかし、私達に知らされたのは、施設局が沖縄県南部の佐敷町の馬天港から3隻の作業船を出港させ、辺野古に向かわせたという事実でした。想定外の動きに、座り込み参加者は、急遽、2隻の抗議船とカヌー艇8隻を出し、4メートルもある高波の中、辺野古沖に現れた作業船の前後左右を行き交いながら「帰れ！」「調査をやめろ！」と声の限りに叫び、基地建設の中止を訴えました。

辺野古を避け、海上で着手された調査を完全に阻止できなかったことは、本当に悔しいことです。しかし私たちは、防衛施設局に陸上からの正面衝突ではなく、このような卑劣なやり方でしか基地建設に着手させませんでした。これは、座り込みを始めとした基地建設阻止の闘いの勝利だと言えます。

しかし、沖縄大ヘリ墜落事故で露呈した様々な問題や沖縄世論の高まりを踏みにじり、さらなる差別を沖縄に押し込めようとする日本政府、防衛施設局のこのような暴挙を私達は決して許すことはできません。改めて、辺野古現地へ多くの人々が駆けつけることを呼びかけるとともに、気持ちを新たに引き締め、基地建設を絶対許さない闘いを大阪を始め、日本全国から展開していきましょう！（松本）



漁港の岸壁では、施設局にチャーターされて出て行く漁船に対して「一緒に海を守りましょう！」などの説得のアピールが繰り返される。



辺野古の海は「自然環境の厳正な保護を図る区域ランク1」に指定され、天然記念物のジュゴンが住んでいます。ジュゴンだけではなく貴重な海藻、サンゴ、海ガメ、魚介類などが多く生息しています。

